

淡水魚類

1 選定・評価方法の概要

東京都の淡水魚類の生息水域は、主に江戸川・隅田川を含む旧利根川水系と、荒川水系、多摩川水系、鶴見川水系源流部、および神田川、目黒川を始めとする小規模河川群とそれらに付随する湧水池や溜池からなる。なお、ここでいう淡水魚は純淡水魚のほか、通し回遊魚^{*1}や汽水魚^{*2}を含んでいる。

旧利根川水系と荒川水系は河川形態 Bc 型^{*3}の下流域と感潮域^{*4}からなり、両岸には切り立ったコンクリート護岸が施されている。河口部には局所的に干潟や人工干潟が形成されており、狭いながらも汽水魚の生息水域となっている。近年は下水道の整備により水質の改善が進み、下流域・河口域ともに魚類相に回復の兆しが認められる。

多摩川水系は、Aa 型^{*3}の源流部から感潮域まで多様な河川環境を持つ都内唯一の水系であるが、多数のダムや堰などの河川横断構造物によって河道が分断されているために、河川環境の連続性は絶たれている。

淡水魚類の検討対象種は、前回(1998年版)の掲載種の37種に4種を加えた41種とし、絶滅のおそれの評価は、基本的に定性的要件を用いた。

2 選定・評価結果の概要

評価の結果、13科38種が本レッドリストの掲載種に選定された。このうち5種は留意種としてのみ選定された。

奥多摩湖より上流の渓流域にはヤマメ、イワナ、カジカ、アブラハヤ、ウグイなどの生息域がまだ広く存在するが、河床の荒廃により自然繁殖は困難に陥っている水域が多い。現在見られるヤマメやイワナの多くは種苗放流によって維持されている個体群であり、天然個体群はごく限られた水域に残存するのみである。

奥多摩湖下流から日原川合流までの多摩川は、河川流量が非常に少なく、魚類相も貧弱である。日原川の合流点から羽村堰までは清冽な水が確保されており、ヤマメやウグイ、カジカなどが生息しているが、河床のアーマー化^{*5}が進んで河川環境の多様性が乏しいので、魚類の個体数も限られている。

羽村堰から下流は、この堰からの水道水の取水により下流の河川流量が極端に少なくなる。さらに下流の多摩大橋付近からは下水処理水が放流されて河川流量は増加するが、水温や水質が大きく変化するために魚類相や底生動物相は大きく変化する。以前は農繁期限定で羽村堰から毎秒2トンの灌漑用水が下流へ放水されていたが、10年ほど前から環境維持用水として年間を通じて毎秒2トンが流されるようになり、冬季の生息環境は改善されている。

田園調布取水堰より下流の感潮域は、下水道の整備や環境維持用水の確保などにより水質は高度経済成長期と比較して大幅に改善している。また、田園調布取水堰が平成18年よりアユの遡上期に合わせて堰が開放されるようになったことにより、堰の上流に堆積していた土砂が河口域に供給されて河口の干潟が復活した。これらの環境変化を反映し、河口域における汽水魚の出現種数や個体数は近年増加傾向にある。

このように、多摩川水系の淡水魚の生息状況は近年好転傾向にある。一方で、比較的水質汚染に強い魚種として、中流域ではウグイ、ギンブナ、モツゴ、河口域ではボラ類、マルタ、マハゼなどが増えている。

また、多摩川水系では、外来種の侵入が影響を及ぼしている。国内外来種としては、近年、ム

ギツク、オヤニラミ、スゴモロコなどアユ種苗に混入しにくい魚種の侵入が目立っている。一方、国外外来種も、かつてはカダヤシやオオクチバスなど放流目的の明確な種が多かったが、最近はグッピーやプレコなどの観賞魚が多くなり、平成 15 年くらいからはコクチバスやガーパイクなど外来種への食害が懸念される種が増える傾向にある。生息確認種数は国内・国外外来種の合計で既に 200 種を超え、在来種数よりもはるかに多い。

多摩川以外の河川でも、下水道などの整備によって昭和 60 年前後を境に水質の改善が進み、荒川、江戸川、多摩川の下流域や多くの小規模河川では、平成 15 年頃よりアユやウキゴリ類などの回遊魚の遡上が顕著に回復し、野川や善福寺川などではアブラハヤやギバチなど比較的きれいな水を好む淡水魚の姿も見られるようになった。

以上のように、都内の淡水魚類の生息状況は近年大きく改善され、種の多様性も高まる傾向にある。ただし、これは下水道などの整備や、一部の河川で実施されている高度処理水を利用した流量の確保に依存している。

多摩川や荒川などの大規模河川では、ダムや堰などの河川横断工作物が多数設置されている。これらの工作物には人工魚道が設置されていないか、設置されていても機能的に充分とはいえないために、ハゼ類を中心とする多くの回遊魚は生息できる水域が実質的に中下流域のごく一部に限定されている。

*¹ 通し回遊魚：川と海を往来する回遊を行う魚。

*² 汽水魚：河川の河口部周辺など、淡水と海水が混合する汽水域を主な生息場とする魚。

*³ Bc 型、Aa 型：可児藤吉による河川区分で、Bc 型とは 1 蛇行区間に瀬と淵が一つずつあり、瀬と淵の落差が小さくて瀬から淵へ波立たずに流れ込む場合をいう。Aa 型とは 1 蛇行区間に瀬と淵が複数あり、瀬と淵の落差が大きい場合をいう。

*⁴ 感潮域：河川の下流部で海洋の潮汐変動に応じて水位変動が起こる区間。

*⁵ アーマー化：上流からの細粒の砂礫の供給が減少して河床の表面から細粒の砂礫が失われ、それによって河床が大粒径の石だけからなるようになること。

(丸山 隆・山崎 充哲)

スナヤツメ

Lethenteron reissneri

ヤツメウナギ目
ヤツメウナギ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
CR	CR	EN	EN	VU

【形態・生態】

体長 20cm 程度。体型は細長く、背面は黒暗色、体表はぬめりがあり、鱗は目視できない。口は漏斗状の形状をしている。一生を淡水で過ごし、幼生期（アンモシーテス幼生）は目がなく泥中に潜り、珪藻などの藻類や微細な有機物を食べる。成魚は胃がなく何も食べない。主に河川の中・下流域に生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

南多摩、西多摩の河川に生息環境が残っているが、少数が生息しているにすぎない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水質や底質の悪化、河床のアーマー化、護岸のコンクリート化など、生息環境の悪化により、生息水域や個体数が減少し絶滅のおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

ウナギ

Anguilla japonica

ウナギ目
ウナギ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
VU	VU	VU	VU	EN

【形態・生態】

体長 100cm に達する。体型は細長く、背面は黒暗色、体表はぬめりが強く、鱗は皮下に埋没している。目は小さく、口は大きく眼球より後ろまで切れ込む。海で産卵、ふ化し川へ遡上する「降河回遊」生活形態である。ふ化後の仔魚の体型は平たく、レプトケファルス（葉形幼生）と呼ばれる。川へ遡上する頃には体色は暗黄土色になる。海につながっている河川の河口域から上流域などに生息し、夜行性で礫底や泥底を好み、日中は礫の隙間や泥の中に身を潜める。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

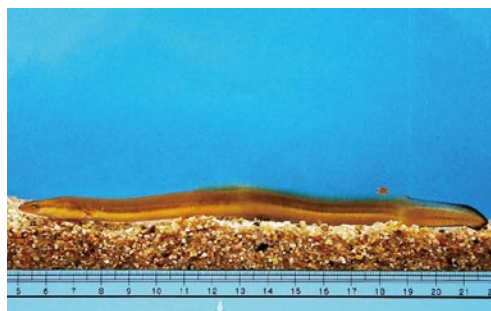
海につながっている河川で見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水質や底質の悪化、河床のアーマー化、護岸のコンクリート化など、生息環境の悪化により、生息水域や個体数が減少し絶滅のおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

キンブナ

Carassius auratus subsp. 2

コイ目
コイ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
CR EN	VU	VU	VU	VU

【形態・生態】

体長 15cm 程度。体型は扁平するが他のフナ類と比べると体高は低い。口ひげはなく、背面は黒暗色で側面は黄褐色、鱗がやや粗い。河川の中・下流の緩流域、それに続く用水路、浅い池沼などに生息する。

【分布の概要】

本州（東北、関東）

【都における生息環境】

北多摩、南多摩、西多摩には生息環境が残っており少数が生息している。区部の小河川はコンクリート化が進み生息環境がほとんどない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水質や底質の悪化、河床のアーマー化、護岸のコンクリート化など、生息環境の悪化により、生息水域や個体数が減少し絶滅のおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

ミヤコタナゴ ※備考 (p.415)

Tanakia tanago

コイ目
コイ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
EX	EX	—	—	CR

【形態・生態】

体長 5cm 程度。体型は扁平し、1 対の口ひげがある。体側の側線は不完全で尾柄までない。湧水を水源とした細流やため池に生息する。

【分布の概要】

本州（関東の一部）

【都における生息環境】

東京都全域で野生種が自然に生息している場所は見あたらず、絶滅したと考えられる。稀に捕獲の情報が流れるが、追跡調査で仔稚魚の発生が確認されないことなどから自然分布ではないと推測される。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修や圃場整備などによる生息環境の荒廃や産卵母貝の生息環境が消失したことが、絶滅の大きな要因と考えられる。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

ヤリタナゴ ※備考 (p.415)

Tanakia lanceolata

コイ目
コイ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
EX	EX	DD	DD	NT

【形態・生態】

体長 8cm 程度。体型は扁平し、1 対の口ひげがある。銀白色が強く、肩部に暗斑は入らず、体側面の緑色線紋は細く不鮮明。流れが緩やかで水草の豊富な河川、湖、池沼、用水路などに生息する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

区部、北多摩では野生種が自然に生息している場所は見あたらず、絶滅したと考えられる。稀に捕獲の情報が流れるが、追跡調査で仔稚魚の発生が確認されないことなどから自然分布ではないと推測される。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修や圃場整備などによる生息環境の荒廃や産卵母貝の生息環境が消失したことや肉食性外来魚の侵入が、個体数の減少や絶滅の大きな要因と考えられる。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

タナゴ ※備考 (p.415)

Acheilognathus melanogaster

コイ目
コイ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
EX	EX	EX	—	EN

【形態・生態】

体長 6cm 程度。体型は扁平するが体高は低く、1 対の口ひげがある。えらの後ろの暗色斑が三角形。流れが緩やかで水草の豊富な河川、湖、池沼、用水路などに生息する。

【分布の概要】

本州（東北の太平洋側と関東）

【都における生息環境】

区部、北多摩では野生種が自然に生息している場所は見あたらず、絶滅したと考えられるが、稀に放流個体らしいものが捕獲される。南多摩では以前は生息していた可能性があるが、最近の確認情報はない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修や圃場整備などによる生息環境の荒廃や産卵母貝の生息環境が消失したことが、絶滅の大きな要因と考えられる。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

アカヒレタビラ ※備考 (p.415)

Acheilognathus tabira subsp. 1

コイ目
コイ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
EX	—	—	EX	EN

【形態・生態】

体長 7cm 程度。体型は扁平し、1 対の口ひげがある。オスの尻びれ外縁部は赤色に発色する。流れが緩やかで水草の豊富な河川、湖、池沼、用水路などに生息する。

【分布の概要】

本州（北東北、関東、北陸、山陰）

【都における生息環境】

区部では野生種が自然に生息している場所は見あたらず、絶滅したと考えられるが、稀に放流個体らしいものが捕獲される。西多摩では以前は生息していた可能性があるが、最近の確認情報はない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修や圃場整備などによる生息環境の荒廃や産卵母貝の生息環境が消失したことや肉食性外来魚の侵入が、絶滅の大きな要因と考えられる。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

ゼニタナゴ ※備考 (p.415)

Acheilognathus typus

コイ目
コイ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
EX	EX	EX	—	CR

【形態・生態】

体長 10cm 程度。体型は扁平し、口ひげはない。鱗が細かく側線は不完全。河川の中・下流域で比較的流れの穏やかなところや、用水路、湖沼などの中層から下層に生息する。

【分布の概要】

本州（北東北、関東、北陸）

【都における生息環境】

区部、北多摩では野生種が自然に生息している場所は見あたらず、絶滅したと考えられるが、稀に放流個体らしいものが捕獲される。南多摩では以前は生息していた可能性があるが、最近の確認情報はない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河川改修や圃場整備などによる生息環境の荒廃や産卵母貝の生息環境が消失したことや肉食性外来魚の侵入が、絶滅の大きな要因と考えられる。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

アブラハヤ ※備考 (p.415)

Phoxinus lagowskii steindachneri

コイ目
コイ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
VU	VU	NT	CR	

【形態・生態】

体長 15cm 程度。体型は紡錘型で、口ひげはない。鱗が細かく体表のぬめりが強い。河川の中・上流域の淵や淀みに生息する。

【分布の概要】

本州（福井、岡山以北）

【都における生息環境】

区部、北多摩では、護岸がコンクリート化されていない限られた水域で、水質が改善されたことにより、やや増加傾向にある。南多摩では多摩川などで多く見られる。西多摩では近縁種のタカハヤが移入され繁殖している。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

護岸のコンクリート化、水質や底質の悪化など、生息環境の悪化により、生息水域や個体数が減少するおそれがある。ちなみに多摩川では本流のほぼ全域がタカハヤまたは交雑魚に置き換わり、本種は本流から堰堤や滝などにより隔離された沢などに残存しているのみである。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

マルタ

Tribolodon brandti

コイ目
コイ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
*	*	*	●	

【形態・生態】

体長 60cm 程度。体型は紡錘型で、口ひげはない。オスの婚姻色（赤色縦条）は 1 本しかない。婚姻色の出ていない本種と他のウグイ属との識別は、目視では困難である。主に沿岸部から河口部の汽水域に生息し、春の産卵期には川を遡上する。

【分布の概要】

北海道、本州（富山、東京湾以北）

【都における生息環境】

春に海から遡上可能な東京都本土部の河川中・下流域に見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

昭和 50 年代に河川の汚染が進んだ時代には東京都本土部の河川から姿を消したが、近年の水質改善とともに多くの河川に東京湾や運河から産卵のために遡上してくるようになった。平成 18 年から多摩川の河口堰である田園調布取水堰の開放により個体数を増やしているが、水質や底質の悪化、河床のアーマー化など、生息環境の悪化により、生息水域や個体数が減少するおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.

(執筆: 山崎充哲・丸山隆)



シナイモツゴ

Pseudorasbora pumila pumila

コイ目
コイ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
EX	—	—	—	CR

【形態・生態】

体長 5cm 程度。体型は紡錘型で、口ひげはない。側線は不完全で胸びれ上部までしかない。同属のモツゴよりも体高がやや高く胴断面は丸い。平野部の浮葉植物が繁茂するような自然度の高い浅い池沼に生息する。

【分布の概要】

本州（関東、新潟以北）

【都における生息環境】

東京都全域で野生種が自然に生息している場所は見あたらず、絶滅したと考えられる。稀に捕獲の情報が流れるが、追跡調査で稚稚魚の発生が確認されないことなどから自然分布ではないと推測される。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発などにより多くの細流やため池などが護岸改修され、その結果生息環境が悪化したことや放流由来のモツゴとの交雑による遺伝子汚染が、絶滅の大きな要因と考えられる。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.

(執筆: 山崎充哲・丸山隆)



カマツカ

Pseudogobio esocinus esocinus

コイ目
コイ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
NT	NT	NT	NT	

【形態・生態】

体長 20cm 程度。体型は細長い紡錘型で、1 対の口ひげがある。吻は下方に突き出すように伸びる。背面に黒色斑が点在する。主に河川の中・下流域や湖沼の砂底に生息する。生活や繁殖にきれいな砂地を必要とする。

【分布の概要】

本州（岩手、山形以南）、四国、九州

【都における生息環境】

昭和 50 年代に河川の汚染が進んで東京都本土部の河川の多くで姿を消したが、近年水質の改善とともに多摩川や柳瀬川などで増えている。

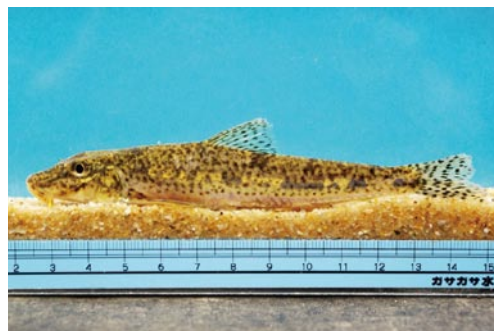
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現在の区部、北多摩の河川には生息可能な環境がほとんど残っておらず、ごく限られた水域に少数が生息しているのみである。南多摩、西多摩には生息環境がまだ残っており少数が生息しているが、水質や底質の悪化、河床のアーマー化など、生息環境の悪化により、生息水域や個体数が減少するおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.

(執筆: 山崎充哲・丸山隆)



ニゴイ

Hemibarbus barbus

コイ目
コイ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
NT	NT	NT	NT	

【形態・生態】

体長 60cm 程度。体型は紡錘型で、1 対の口ひげがある。吻は下方に突き出すように伸びる。主に河川の中・下流域や池沼などに生息するが、汽水域にも生息できる。産卵にきれいな砂礫底を必要とする。

【分布の概要】

本州（中部以北、山口）、九州

【都における生息環境】

昭和 50 年代に河川の汚染が進んだ時代に東京都本土部の河川から多くが姿を消したが、近年水質の改善とも多摩川などで増えている。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水質や底質の悪化、河床のアーマー化など、生息環境の悪化により、生息水域や個体数が減少するおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら，1989；中坊徹次（編），2000。



（執筆：山崎充哲・丸山隆）

シマドジョウ

Cobitis biwae

コイ目
ドジョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
VU	VU	VU	NT	

【形態・生態】

体長 10cm 程度。体型は細長く、体側に黒暗色の縞模様がある。3 対の口ひげがあり、体表はぬめりが強い。河川の中流域の砂礫底に生息する。

【分布の概要】

本州、四国

【都における生息環境】

昭和 50 年代に河川の汚染が進んだ時代に区部、北多摩、南多摩の河川の多くから姿を消したが、近年水質の改善とも多摩川や柳瀬川などで増えている。西多摩では多摩川と秋川の合流点より上流で普通に見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

きれいな砂底を生息環境としているため、水質や底質の悪化、河床のアーマー化などにより、個体数が減少するおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら，1989；中坊徹次（編），2000。



（執筆：山崎充哲・丸山隆）

ホトケドジョウ

Lefua echigonia

コイ目
ドジョウ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
CR EN	CR EN	VU	VU	EN

【形態・生態】

体長 6cm 程度。体型は細長い紡錘形。4 対の口ひげがあり、体表はぬめりが強い。水温が低く流れの緩やかな河川や湿地、水田などに生息する。

【分布の概要】

本州（青森を除く三重、京都、兵庫以北）

【都における生息環境】

人里付近の河川や湧水由来の水域などに広く生息していたが、区部、北多摩の小河川のコンクリート化の進行で生息環境がほとんど失われた。まだ限られた水域に生息可能な環境が残っており、少数が生息しているが、生息環境の悪化は今も続いている。南多摩、西多摩には生息環境が残っており少数が生息している。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水質や底質の悪化、護岸のコンクリート化、河床のアーマー化など、生息環境の悪化により、個体数が減少し絶滅のおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら，1989；中坊徹次（編），2000。



（執筆：山崎充哲・丸山隆）

ギバチ

Pseudobagrus tokiensis

ナマズ目
ギギ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
CR	VU	VU	VU	VU

【形態・生態】

体長 22cm 程度。体型は細長く鱗はなく、体表にぬめりがある。4 対の口ひげがあり、尾びれ後縁の切れ込みは浅い。流れがあり比較的水質も良い河川の中流域から上流域下部に生息する。

【分布の概要】

本州（神奈川、富山以北）

【都における生息環境】

昭和 50 年代に河川の汚染が進んだ時代に区部、北多摩、南多摩の河川から多くが姿を消したが、近年水質の改善とともに多摩川や柳瀬川などで増えている。西多摩は多摩川と秋川の合流点より上流で普通に見られる。

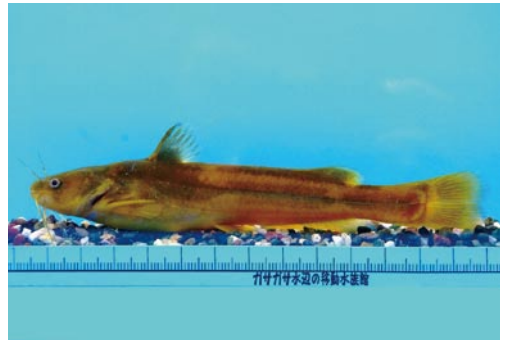
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

きれいな砂底と隠れ場となる物陰を必要としているため、水質や底質の悪化、護岸のコンクリート化、河床のアーマー化など、生息環境の悪化により、個体数が減少するおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.

(執筆: 山崎充哲・丸山隆)



ナマズ

Silurus asotus

ナマズ目
ナマズ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
*	*	*	*	

【形態・生態】

体長 70cm 程度。体型は細長く鱗はなく、体表にぬめりがある。扁平した頭に大きな口に 4 対の口ひげがあり、尾びれ後縁の切れ込みは浅い。流れの緩やかな河川、湖沼、水田、用水路などに生息する。

【分布の概要】

北海道（南部）、本州、四国、九州

【都における生息環境】

東京都本土部の大河川では水質の改善とともに個体数は増える傾向にある。しかし、用水路のコンクリート化が進み、河川から産卵場である水田への移動が困難になりつつある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

現状では絶滅のおそれは少ないが、仔稚魚の生息場所や隠れ場となる物陰も必要で、河川工事に際しては用水路への遡上経路の確保や水草・転石などの物陰の確保に留意する。水質や底質の悪化、護岸のコンクリート化、河床のアーマー化など、生息環境の悪化により、個体数が減少するおそれがあり、今後の動向に留意する必要がある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.

(執筆: 山崎充哲・丸山隆)



イシカワシラウオ

Salangichthys ishikawae

サケ目
シラウオ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
*	・	・	・	

【形態・生態】

体長 7cm 程度。体型は細長く、体色は半透明な白色。口ひげはなく、あぶらびれがある。主に外海に面する沿岸に生息する。水温の高いときには汽水域に入ることもある。

【分布の概要】

本州（青森から和歌山の太平洋側）

【都における生息環境】

昭和 50 年代に河川の汚染が進んだ時代に姿を消したが、多摩川では近年の水質改善と平成 18 年から多摩川の河口堰である田園調布取水堰の開放により、砂が下流に堆積し生息環境が整い田園調布取水堰下流で数個体が確認された。

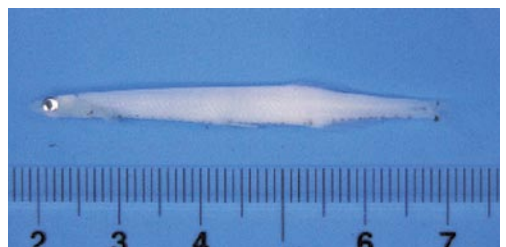
【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

産卵場となる河口域の水質や底質の悪化など、生息環境の悪化により個体数が減少するおそれがある。特に数個体ではあるが、最近になって再確認されたことから、今後の動向に留意する必要がある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.

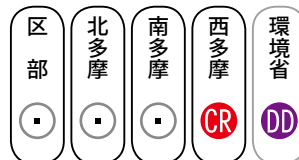
(執筆: 山崎充哲・丸山隆)



ニッコウイワナ

Salvelinus laucomaenis pluvius

サケ目
サケ科



【形態・生態】

体長 30cm 程度。体型は細長い紡錘形。口ひげはなくあぶらびれがある。夏の最高水温が 20℃ 以下の河川の上流域や山間の湖などに生息する。

【分布の概要】

本州（山梨の富士川、鳥取の日野川以北）

【都における生息環境】

西多摩の多摩川上流域のみに生息している。釣りの対象として他産地の養殖魚が放流され、在来個体群との交雑が進んでしまった。在来個体群は本流から堰堤や滝などで隔離された沢奥などにわずかに生息しているのみである。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

西多摩には本流から堰堤や滝などで隔てられた、限られた沢に生息環境がまだ残っており、ごく少数が生息しているが、護岸のコンクリート化、水質や底質の悪化、河床のアーマー化など、生息環境の悪化により生息水域や個体数が減少するおそれがある。他産地の個体の放流も在来個体群を絶滅に追い込むおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.

(執筆: 山崎充哲・丸山隆)



サクラマス(降海型), ヤマメ(陸封型)

Oncorhynchus masou masou

サケ目
サケ科



【形態・生態】

体長サクラマス 50cm 程度、ヤマメ 30cm 程度。サクラマスの体型は紡錘形で銀白色、あぶらびれがある。ヤマメの体型は扁平した紡錘形で、体側に紫褐色の斑紋が点在しあぶらびれがある。

【分布の概要】

北海道、本州（神奈川、山口以北）、九州（大分、宮崎以外）

【都における生息環境】

区部、北多摩、南多摩では大規模河川がサクラマスの移動経路になっていたが、水質汚濁や河川横断構造物の影響により昭和 50 年代には姿を消した。ヤマメは西多摩の多摩川水系上流域に広く生息するが、ほとんどが放流された養殖魚であり、在来個体群は沢奥などに生息している可能性がわずかにあるのみである。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

サクラマスを存続させるためには、上流域まで安全に遡上できる経路の確保が不可欠である。ヤマメの在来個体群は、水質や底質の悪化などにより生息水域や個体数が減少するおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.

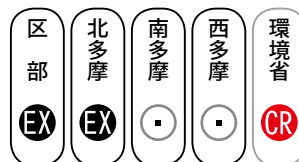
(執筆: 山崎充哲・丸山隆)



ムサシトミヨ

Pungitius sp.

トゲウオ目
トゲウオ科



【形態・生態】

体長 5cm 程度。体型は扁平した紡錘形。背びれに 8～9 本のとげ、尾柄に鱗板がある。体色は緑の強い暗緑色。

【分布の概要】

本州（関東の一部）

【都における生息環境】

東京都全域で在来個体群が自然に生息している場所は見あたらず、その資料もなく絶滅したと考えられる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

開発などにより湧水の枯渇が進み、その結果、生息環境が消失したことが、絶滅の大きな要因と考えられる。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

メナダ

Chelon haematocheilus

ボラ目
ボラ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
NT	*	■	■	

【形態・生態】

体長 70cm 程度。体型は紡錘型で、頭部は扁平する。尾びれはあまり湾入せず、眼球の周囲が赤く、口ひげはない。河口域や干潟などに生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

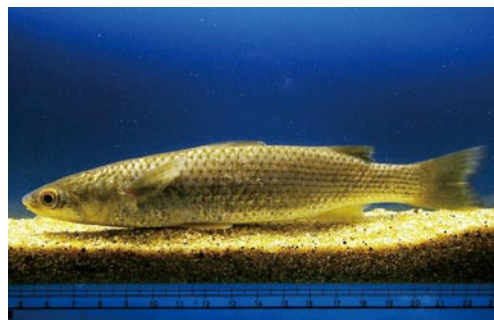
ボラによく似るがその個体数は少なく、区部の感潮域に少数が回遊してくる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

河口域や干潟などの環境が悪化することにより、個体数が減少するおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

メダカ

※備考 (p.415)

Oryzias latipes

ダツ目
メダカ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
CR EN	CR EN	CR EN	CR EN	VU

【形態・生態】

体長 3cm 程度。体型は紡錘型で、頭部はやや扁平する。尾びれは湾入せず目が大きく、口は上を向き小さく口ひげがない。流れの緩やかな河川や水路などに生息する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

東京都本土部の大河川から小河川まで、水がきれいで流れの緩やかな水域に広く見られた。現在も捕獲される水域はかなり広いが、その多くは在来個体群ではなく放流された個体による。在来個体群の多くは河川水質が悪化した昭和 50 年代に絶滅したか、あるいは他産地の放流魚との交雑が進んでしまい、現在では絶滅の危機に瀕している。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

護岸のコンクリート化、水質や底質の悪化など、生息環境の悪化により生息水域や個体数が減少するおそれがある。他産地の個体の放流も在来個体群を絶滅に追い込むおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

カジカ(カジカ大卵型；河川陸封型)

Cottus pollux

カサゴ目
カジカ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
*	CR EN	CR EN	VU	NT

【形態・生態】

体長 13cm 程度。体型は紡錘型で、頭部は丸く、川底に這うような体型。口は大きく口ひげは無く、背面には暗褐色の鞍状斑紋がある。河川の中・上流域の礫底に生息する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

区部では、水温が低い冬季に確認されているが、繁殖はしていない。北多摩、南多摩でも同様であるが、冷たい湧水のある場所や、崖線などからの小川で越冬している個体もある。西多摩では多摩川と秋川の合流点より上流域で普通に見られる。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

護岸のコンクリート化や水質悪化によるヘドロの堆積、河床のアーマー化により個体数が減少するおそれがある。区部においては、水温の上昇する夏に、堰の多くに設置されている隔壁式魚道を遡上できないため、上流に移動できずへい死してしまっている。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

トビハゼ

Periophthalmus modestus

スズキ目
ハゼ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
CR	■	■	■	NT

【形態・生態】

体長 8cm 程度。細長い紡錘型で、干潟を歩くような体型。頭部は丸く眼球が突き出す。口ひげはなく、体側には暗褐色の斑紋と小さな白点がある。汽水域の泥干潟に生息する。

【分布の概要】

本州、四国、九州

【都における生息環境】

昭和 50 年代に河川の汚染が進んだ時代に急激に個体数を減らしたが、区部では近年の水質改善とともに大河川の河口や干潟で個体数が増えつつある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水質悪化によるヘドロの堆積や水質汚濁、干潟の消失などにより、個体数が減少するおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

ボウズハゼ

Sicyopterus japonicus

スズキ目
ハゼ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
DD	DD	DD	—	

【形態・生態】

体長 15cm 程度。体型は細長い紡錘型で、頭部は丸く厚い唇に口ひげはない。体側に暗色横帯がありぬめりがある。腹びれと口は吸盤状になっている。河口域から上流域まで全域に生息する。

【分布の概要】

本州 (栃木以南)、四国、九州

【都における生息環境】

昭和 50 年代に河川の汚染が進んだ時代に姿を消したが、多摩川では近年の水質改善とともに生息環境が整い、田園調布取水堰魚道や二ヶ領宿河原堰魚道で数個体ずつが確認された。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水質悪化によるヘドロの堆積や水質汚濁などにより、個体数が減少するおそれがあり、特に数個体ではあるが、最近になって再確認されたことから、今後の動向に留意する必要がある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

シロウオ

Leucopsarion petersii

スズキ目
ハゼ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
DD	■	■	■	VU

【形態・生態】

体長 5cm 程度。体型は細長く、透明で腹腔や浮き袋が透けて見え鱗も側線もない。口ひげはない。沿岸の浅い海に生息し、早春には成魚が河川の下流域に遡上して産卵する。

【分布の概要】

北海道 (南部)、本州、四国、九州

【都における生息環境】

昭和 50 年代に河川の汚染が進んだ時代に姿を消したが、区部の多摩川では近年の水質改善と平成 18 年から河口堰である田園調布取水堰の開放により、砂礫が下流に堆積し生息環境が整い、田園調布取水堰下流で数個体が確認された。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水質悪化によるヘドロの堆積や水質汚濁などにより、個体数が減少するおそれがあり、特に数個体ではあるが、最近になって再確認されたことから、今後の動向に留意する必要がある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.

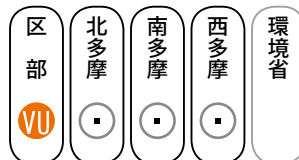


(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

ミミズハゼ

Luciogobius guttatus

スズキ目
ハゼ科



【形態・生態】

体長 8cm 程度。体型は細長く円筒形、ぬめりがある。口ひげはない。河川の汽水域や下流域から海岸の潮間帯まで広く生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

昭和 50 年代に河川の汚染が進んだ時代に急激に個体数を減らしたが、区部では近年の水質改善とともに干潟や河口で個体数が増えつつある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水質悪化によるヘドロの堆積や水質汚濁などにより、個体数が減少するおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.

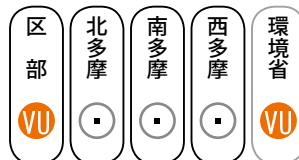


(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

エドハゼ

Gymnogobius macrognathos

スズキ目
ハゼ科



【形態・生態】

体長 4cm 程度。体型は細長い紡錘型で、下顎下部にひげ状突起がない。河川の汽水域から内湾の干潟に生息する。

【分布の概要】

本州 (宮城以南の太平洋側、兵庫の日本海側、兵庫から山口の瀬戸内海)、九州 (大分、福岡、宮崎)

【都における生息環境】

昭和 50 年代に河川の汚染が進んだ時代に急激に個体数を減らしたが、区部では近年の水質改善とともに河川の干潟や河口で個体数が増えつつある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水質悪化によるヘドロの堆積や水質汚濁などにより、個体数が減少するおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.

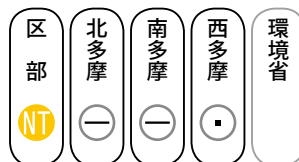


(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

ビリンゴ

Gymnogobius castaneus

スズキ目
ハゼ科



【形態・生態】

体長 5cm 程度。体型は細長い紡錘型で体側に暗色横斑がある。腹びれは吸盤状になっている。河川の感潮域の砂泥底に生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

昭和 50 年代に河川の汚染が進んだ時代に急激に個体数を減らしたが、区部では近年の水質改善とともに、河川の干潟や河口で個体数が増えつつある。河口堰である平成 18 年からの田園調布取水堰の開放により河川に遡上していると思われるが、詳細な調査結果はない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水質悪化によるヘドロの堆積や水質汚濁などにより、個体数が減少するおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

ジュズカケハゼ ※備考 (p.415)

Gymnogobius laevis

スズキ目
ハゼ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
VU	VU	VU	VU	EN

【形態・生態】

体長 5cm 程度。体型は細長い紡錘型で体側に暗色横斑がある。産卵期には雌の婚姻色が顕著で、ひれが黒くなり体側の黄色帯が鮮やかになる。河川の中・下流域や湖沼、湧水、掘などに生息する。

【分布の概要】

北海道、本州（福井、長野、東京以北）

【都における生息環境】

昭和 50 年代に河川の汚染が進んだ時代に急激に個体数を減らしたが、近年の水質改善とともに個体数が増えつつある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

きれいな砂礫底を生息環境としているため、護岸のコンクリート化や水質悪化によるヘドロの堆積や水質汚濁、河床のアーマー化などにより、個体数が減少するおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

アシシロハゼ

Acanthogobius lactipes

スズキ目
ハゼ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
*	■	■	■	

【形態・生態】

体長 9cm 程度。体型は細長い紡錘型で頭がやや丸い。体側に暗色斑がある。河川の汽水域から内湾に生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

昭和 50 年代に河川の汚染が進んだ時代に急激に個体数を減らしたが、区部では近年の水質改善とともに河川の干潟や河口で個体数が増えつつある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水質悪化によるヘドロの堆積や水質汚濁などにより、個体数が減少するおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

マサゴハゼ

Pseudogobius masago

スズキ目
ハゼ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
VU	■	■	■	VU

【形態・生態】

体長 3cm 程度。体型は細長い紡錘型で頭がやや丸い。体側に暗色斑がある。河川の汽水域の泥底に生息する。

【分布の概要】

本州（宮城以南）、四国、九州

【都における生息環境】

昭和 50 年代に河川の汚染が進んだ時代に急激に個体数を減らしたが、区部では近年の水質改善とともに河川の干潟や河口で個体数が増えつつある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水質悪化によるヘドロの堆積や水質汚濁などにより、個体数が減少するおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

ヒメハゼ

Favonigobius gymnauchen

スズキ目
ハゼ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
NT	■	■	■	

【形態・生態】

体長 9cm 程度。体型は細長い紡錘型で尾柄が細い。体側に暗色斑がある。河口域やそれに続く干潟に生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

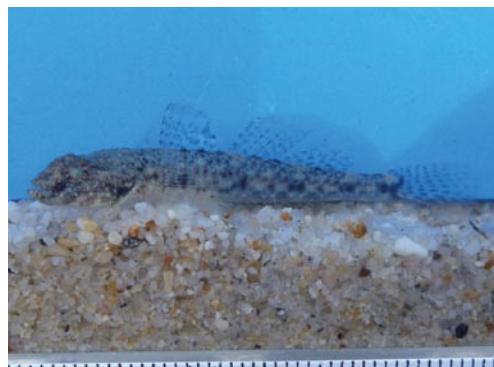
昭和 50 年代に河川の汚染が進んだ時代に急激に個体数を減らしたが、区部では近年の水質改善とともに河川の干潟や河口で個体数が増えつつある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水質悪化によるヘドロの堆積や水質汚濁などにより、個体数が減少するおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

アベハゼ

Mugilogobius abei

スズキ目
ハゼ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
NT	■	■	■	

【形態・生態】

体長 4cm 程度。体型は細長い紡錘型で頭は丸い。体側に暗色斑と尾びれに向かって伸びる 2 本の黒褐色縦帯がある。河川の汽水域の泥底に生息する。

【分布の概要】

本州 (宮城、石川以南)、四国、九州

【都における生息環境】

昭和 50 年代に河川の汚染が進んだ時代に急激に個体数を減らしたが、区部では近年の水質改善とともに河川の干潟や河口で個体数が増えつつある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水質悪化によるヘドロの堆積や水質汚濁などにより、個体数が減少するおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

スジハゼ

Acentrogobius pflaumii

スズキ目
ハゼ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
NT	■	■	■	

【形態・生態】

体長 5cm 程度。体型は細長い紡錘型で頭は丸い。ぬめりがあり鱗は目立たない。体側に暗色斑がある。河川の汽水域から沿岸の浅い海域に生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

昭和 50 年代に河川の汚染が進んだ時代に急激に個体数を減らしたが、区部では近年の水質改善とともに河川の干潟や河口で個体数が増えつつある。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

水質悪化によるヘドロの堆積や水質汚濁などにより、個体数が減少するおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

ヌマチチブ

Tridentiger brevispinis

スズキ目
ハゼ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
*	*	*	NT	

【形態・生態】

体長 13cm 程度。体型は細長い紡錘型で頭は丸い。体側に青白色点が点在する。河川の中流域から汽水域、ため池などに生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

昭和 50 年代に河川や池の汚染が進んだ時代に急激に個体数を減らしたが、区部、北多摩、南多摩では近年の水質改善とともに個体数が増えつつある。平成 18 年からの河口堰である田園調布取水堰の開放により魚類の往来ができるようになり個体数を増やしている。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

間隙空間の大きい礫底などを生息環境としているため、護岸のコンクリート化や水質悪化によるヘドロの堆積や水質汚濁、河床のアーマー化などにより、個体数が減少するおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

チチブ

Tridentiger obscurus

スズキ目
ハゼ科

区 部	北 多 摩	南 多 摩	西 多 摩	環 境 省
*	*	*	—	

【形態・生態】

体長 10cm 程度。体型は細長い紡錘型で頭は丸い。体側に青白色点が点在する。胸びれつけ根の黄斑に橙色線がない。内湾や河川の汽水域に生息する。

【分布の概要】

北海道、本州、四国、九州

【都における生息環境】

昭和 50 年代に河川の汚染が進んだ時代に個体数を減らしたが、多摩川では近年の水質改善と、平成 18 年からの河口堰である田園調布取水堰の開放により魚類の往来ができるようになり、区部、北多摩、南多摩で見られるようになった。西多摩にも遡上してきていると思われるが、詳細な調査結果はない。

【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

間隙空間の大きい礫底などを生息環境としているため、護岸のコンクリート化や水質悪化によるヘドロの堆積や水質汚濁、河床のアーマー化などにより、個体数が減少するおそれがある。

【関連文献】

川那部浩哉ら, 1989; 中坊徹次 (編), 2000.



(執筆: 山崎充哲・丸山隆)

【種名・学名などの準拠文献】

和名、学名、配列は、中坊徹次(編), 2000. 日本産魚類検索 全種の同定 第二版. 東海大学出版会. に準拠した。

【備考】

和名	備考
ミヤコタナゴ	稀に鑑賞用の遺棄個体などが採れることがある。
ヤリタナゴ	
タナゴ	
アカヒレタビラ	
ゼニタナゴ	
アブラハヤ	西多摩では国内外来種のタカハヤの侵入によって、交雑または種間競争による置き換わりが生じている可能性がある。
メダカ	放流された移入個体は多数生息しているが、ここでは在来個体群のみを評価対象とした。
ジュズカケハゼ	環境省ランクは、ジュズカケハゼ関東固有種が EN、ジュズカケハゼ広域分布種が NT。

【留意種とした理由】

和名	地域区分	留意種とした理由
マルタ	区部	かつて減少したが、水質改善に伴って増加傾向にあり、自然の回復状況を表す。ただし、魚道が機能なくなると遡上出来なくなり、繁殖できなくなるため引き続き留意する必要があるため。
	北多摩	
	南多摩	
ナマズ	区部	現状では絶滅のおそれは少ないが、産卵場所や仔稚魚の生息場所となる環境が減少しており、今後の動向に留意する必要があるため。
	北多摩	
	南多摩	
	西多摩	
イシカワシラウオ	区部	一時期は絶滅したと考えられるが、堰の開放による底質改善及び水質改善に伴って近年確認されるようになってきた。ただし、堰が閉まると再び絶滅する可能性が高いことから、今後の動向に留意する必要があるため。
メナダ	北多摩	堰が出来たことによって減少したが、環境配慮による魚道の整備や堰の開放によって近年回復している。ただし、堰が閉まると減少する可能性が高いことから、今後の動向に留意する必要があるため。
カジカ(カジカ大卵型; 河川陸封型)	区部	かつて個体数・生息水域ともに減少したが、水質・底質改善に伴って区部まで分布が拡大し、自然の回復状況を表すため。ただし区部のものは繁殖はしていない。
アシシロハゼ	区部	かつて激減したが、河口干潟の保全に伴って増加傾向にあり、自然の回復状況を表すため。
ヌマチチブ	区部	堰が出来たことによって減少したが、環境配慮による魚道の整備や堰の開放によって近年回復している。ただし、堰が閉まると減少する可能性が高いため、今後の動向に留意する必要があるため。
	北多摩	
	南多摩	
チチブ	区部	かつて減少したが、水質・底質改善に伴って増加傾向にあり、自然の回復状況を表すため。
	北多摩	
	南多摩	

【関連文献】

中坊徹次 (編), 2000. 日本産魚類検索 全種の同定 第二版 . 東海大学出版会 . 1748 pp.
川那部浩哉・水野信彦・細谷和海, 1989. 日本の淡水魚 . 山と溪谷社 . 720 pp.